

「日本の中の異文化」研究のために

著者	中野 栄夫
出版者	法政大学国際日本学研究所
雑誌名	国際日本学
巻	2
ページ	5-23
発行年	2005-03-31
URL	http://doi.org/10.15002/00022563

「日本の中の異文化」研究のために

中野栄夫

はじめに

旧稿「『国際日本学』方法論構築をめざして」(『国際日本学』第1号)において、雑ぱくではあったが、私の「国際日本学の構築」への心構えと取り組み、そして学んだこと、などを記させて頂いた。そこで述べたことは、つぎのようなことであった。

- 1 「国際日本学」構築の方法として「メタサイエンス」すなわち「学問の学問」という立場が有効であろう。それは、外国人が「日本」をどのようにして見ているかを研究することである。その場合、単にある特定の国の研究者の見方を日本人のみで分析するのではなく、第三者的立場の人を交えて評価することが必要である。
- 2 しかも、その場合、つぎのことも忘れてはならない。外国の人に正しい情報を提供し、正確な説明をなし得るように、われわれも外国人に正しい情報を提供し、また正しく説明できるよう、「日本」に関する研究を深めていかねばならない、ということである。
- 3 「日本学」というとき、まず何よりも先に問題となるのが、「日本」とは何かという点である。「日本」を明確に定義することなしに、「日本学」を語ることは無謀であろう。
- 4 その場合、私は「日本」を所与のもの、単一なものとは見てはならないと考える。これは、今までの歴史観がヤマト中心、稲作中心すぎたことへの反省である。私は仮に「日本」をヤマト、蝦夷・アイヌ、琉球・沖縄に分けて考えたい。

5 総じていえば、「日本」研究を進める場合、単に複数の専門領域から対象にアプローチするのみでなく、しかとした概念規定あるいは方法論が必要である、ということである。

ここに要約した旧稿での指摘は、今でも有効と思っている⁽¹⁾。ここでは、その後の知見を加えて、さらに「日本の中の異文化」研究の方法を確たるものと思いたいと思う。

一 「ヤポネシア」について

旧稿執筆後、何度かの海外調査、そして国内調査を行ったが、私にとってくに印象に残っているのが、今年（2004年）3月に行われた「沖縄のアイデンティティ」と題するシンポジウムであった⁽²⁾。このシンポジウムは、ヨーゼフ・クライナー氏の発案、プロモートによるものであり、国内外の著名な沖縄研究者に集まっていたが、4日間、ほぼ缶詰状態で行われたもので、内容の濃い稔りあるシンポジウムであった。同名のシンポジウムは、昨2003年6月に那覇市の琉球新報社ホールでも開催しているが、じつは、今回のシンポジウムは、昨年のシンポジウムの準備段階で、すでにクライナー氏から提起されていたものである。その準備過程については、現在編集途中である報告書に詳しく述べるつもりであるので、ここでは省略するが、クライナー氏ならではの企画であったと思う。一日も早く報告書を完成させて、世に問いたいと考えている。

ところで、このシンポジウムを契機として、私は「ヤポネシア」という言葉を知った。というより、それまでに聞いたことはあったのだが、何の関心も持たなかったといった方が正確かもしれない。シンポジウムのあと、私は「ヤポネシア」関係文献を収集した。

ヤポネシアという言葉は、鳥尾敏雄氏が提唱した概念であり、一時注目された言葉である。鳥尾敏雄氏個人については、ここでは何も述べないこととするが、ただ、長い間、奄美大島に住んでいたと言うことだけは、ふれておいた方がよいであろう。私がヤポネシア論をここで取り上げるのは、それが、日本学と深く関わると言うからにはほかならない。以下、鳥尾氏の著作（講演を活字化したものも含む）の一部を引用して、ヤポネシア論がいかなるものであるか、

また、それをいかに評価したらよいかを述べたいと思う。なお、引用は初出本ではなく、いくつかの著作を島尾氏自身が編んだ同氏編『ヤポネシア序説』よりとし、ページ順に引用することとする⁽³⁾。

○「私が見た奄美」（島尾敏雄編『ヤポネシア序説』）

A 大島の方言は琉球の方言の中にひとまとまりにされて、本土方言とかなりの違いが認められますが、一般に考えている中国の影響は非常に少ないと思います。中国の影響はむしろ本土のほうに強いので、シマグチでなく、ヤマトグチを使うときに、どうしても漢語が出てくるのです。・・・しかしシマグチでものを言う場合には、それが少ないことに気がつきます。言葉の成り立ちからしても中国語の影響はありません。(p.23)

B …ともかく日本の歴史がはじまるころには、すでに日本民族というものが形成されていて、その日本民族の中から、琉球、奄美の住民だけを、なにかちがったもののようにして除くことはできないと思うのです。(p.24)

C 太平洋は非常に広い海洋であって、その中にはいろいろな島があります。ことに南太平洋のほうに多いのですが、その島々に住む人たちの生活は、お互いに似通った性質を持っているのではないかと考えます。日本もそのひとつではないか。南太平洋にはポリネシア、ミクロネシア、インドネシアの島々がありますが、それと同じように、南太平洋の一つの島々のかたまりとして私は、日本列島があるのだという気がするのです。それで、自分でヤポネシアという名前をつけてみました。・・・私は日本人の生活の面には南太平洋的なものが強いのではないかという感じがするのです。

ところで本土のほうでは、この南太平洋的な生活状況がしだいになくなって来ています。表面は！しかしわれわれの心の奥底にはそういうものが眠ってありますから、ときおり唐突に異容な様相で噴出して来ます。・・・(p.25)

D これは私の仮説ですが、ポリネシアとかミクロネシア、メラネシア、インドネシアの研究が日本でもっと充分になされるようになって、それと日本が比

較研究されるようになれば、この奄美、沖縄の南島地帯が、その研究の大きな拠点になるのではないか。つまり日本の素性をはっきりさせるために、非常に重要な場所になるはずです。(p.26)

E …南太平洋的な生活が、われわれ日本人の生活の中にある重さを与えていると考えた時に、われわれはヤポネシアだという誇りを私は持つことができます。そしてそのヤポネシアを研究する根っこが、奄美、沖縄のあたりにあるのです。(p.27)

○「奄美－日本の南島」（島尾敏雄編『ヤポネシア序説』）

F 誤解をおそれずにいえば、この島々（琉球列島＝引用者注）には近代の文明に毒されない、中世もしくは古代の人間まるごとの生活が息づいていた。(p.39)

G …、琉球列島の島々から受け取れるものは日本のすがた以外のなものでもない。ただ本土でも東北とか九州とかが区別されるように、この島嶼群は本土に対して個性的な地方差をきわだたせていることはまちがいはない。その場合地方差としてあらわれるものは、この地方の特異さというのではなく、その根をさぐっていくと、本土ではすでにひそみきえてしまったものにつながる場合が少なくないのである。(p.40)

○「ヤポネシアと琉球弧」（島尾敏雄編『ヤポネシア序説』）

H つまり奄美諸島と沖縄島を中心にした沖縄諸島、宮古諸島、それに石垣島を主島にした八重山諸島などをひっくるめて私は琉球弧と言いたいのです。沖縄と言うと、どうも奄美が落ちてしまうし、宮古や八重山も、時によっては含まれてきません。琉球とだけ言った場合には、奄美を含めるかどうかには難点が出てくるので、地理学上での琉球弧ということばが包括的でもあり適切だと思うのです。(p.50)

I ですから、神話にしてもそういう文献資料によっても、九州から近畿地方

あたりまでがまず国はじめのその後もずっと、…九州から関東までの地域が日本の国の歴史の舞台になって来たのではないのでしょうか。…。で、琉球弧と東北はその区域の圏外にあって一般的なイメージの外がわに置かれているのではないかと思われるのです。(p.51)

Ｊ 大雑把な言い方をしますと、日本の歴史の曲がり角では、必ずこの琉球弧の方が騒がしくなると言いますか、琉球弧の方からあるサインが本土の方に送られて来るのです。そしてそのために日本全体がざわめきます。それなのに、そのざわめきがおさまってしまうと、また琉球弧は本土から切り離された状態になってしまうという、何かそんな気がして仕方ありません。(p.54)

さて、まず第一に、島尾氏のヤポネシアという語は、Cに「南太平洋にはポリネシア、ミクロネシア、インドネシアの島々がありますが、それと同じように、南太平洋の一つの島々のかたまりとして私は、日本列島があるのだという気がするのです。それで、自分でヤポネシアという名前をつけてみました」とあるように、ポリネシア・ミクロネシア・メラネシア・インドネシアなどと同様に日本列島を位置づけているところにある。しかもそれはたんに島々の集積という点で似ているのではなく、「私は日本人の生活の面には南太平洋的なものが強いのではないか」と述べているように、本質も同様のものと見ているのである。そして、Gに「琉球列島の島々から受け取れるものは日本のすがた以外のなものでもない」とあるように、地域差を認めてはいるが、基本的には同じものと見ていることである。

また第二に、Bに「日本の歴史がはじまるころには、すでに日本民族というものが形成されていて、その日本民族の中から、琉球、奄美の住民だけを、なにかちがったもののようにして除くことはできないと思うのです」、あるいは、Jに見られるように、日本も琉球も、同じ民族であり、その歴史を見ると別々のようではあるが、時代の変動期には、相互にサインを送りあっていると主張している。その徴証として、島尾氏は、①「大和を中心に中央集権ができた時に、琉球弧との交渉のことがいくつか記録されていて、かなり具体的な島々の名前があがっています」、②「戦国時代から徳川はじめにかけて、…その時代

に琉球弧を通して、物質的あるいは精神的なヨーロッパの文明というものが日本に入りこんで来た…」、③「開国のことにしても、…アメリカはまず那覇に根拠地をこしらえておいて、それから浦賀に来ている…」などのことをあげている。

そして第三に、Eに「ヤポネシアを研究する根っこが、奄美、沖縄のあたりにあるのです」、Fに「この島々には近代の文明に毒されない、中世もしくは古代の間まるごとの生活が息づいていた」、Gに「この地方の特異さというものではなく、その根をさぐっていくと、本土ではすでにひそみきえてしまったものにつながる場合が少なくないのである」などとあるように、「本土」では失われた、古き良きものが奄美・沖縄には残っていると主張しているのである。

以上の点が島尾氏の「ヤポネシア」論の基本点と考えるが、その他、次のような点にも注意が引かれる。

すなわち第四に、Aに「大島の方言は琉球の方言の中にひとまとまりにされて、本土方言とかなりの違いが認められますが、一般に考えている中国の影響は非常に少ないと思います。中国の影響はむしろ本土のほうに強い」と見られるように、「シマグチ」（奄美大島語）と「ヤマトグチ」（いわゆる「日本（ヤマト）語」）と比較すると、「ヤマトグチ」の方が中国の影響を強く受けている、と主張していることである。この点、私も同じ理解であるが、ぜひとも言語学者に正確な教えを乞いたいところである。

さらに第五に、Hに「奄美諸島と沖縄島を中心にした沖縄諸島、宮古諸島、それに石垣島を主島にした八重山諸島などをひっくくめて私は琉球弧と言いたいのです」と見られるように、琉球弧という言葉を用いていることも、ヤポネシアという言葉とともに、島尾氏の論の特徴といえよう。この琉球弧という言葉は、今でもしばしば使われる。

以上、私なりの関心にしたがって、島尾氏の主張のポイントを見てきたが、その論点について若干のコメントを加えたいと思う。

まず第一の点であるが、琉球弧はともかくとしても、日本全体を「南太平洋的」と見るのは、無理があろう。島尾氏は「本土のほうでは、この南太平洋的な生活状況がしだいになくなって来ています。表面は！」というが、次第になくなったと言い切るのは無理があろう。「しかしわれわれの心の奥底にはそう

いうものが眠っておりますから、ときおり唐突に異容な様相で噴出して来ます」という主張は、それこそ唐突であろう。

第二の点では、島尾氏は琉球弧の人々も日本民族であるということとなろう。その点、第三の点を含めて、柳田國男氏の主張と同じようなものを感じる。ここで繰り返すまでもなく、柳田氏は琉球語を日本語の一方言と見なし、沖縄を日本の一部、というより、日本の原点と見なした。しかし、柳田氏の考え方と似ているというのは正確な言い方ではないであろう。というのは、引用Fの少し後のところで、島尾氏はつぎのように記している。

わが国の民俗学の第一人者であると思うのですが、柳田國男という方が、最近「海上の道」という書物を出版されました。柳田先生は日本の文化の素性を探るために、文献の学問に頼らずに、実際の風俗慣習の事例を集めることによってその中から、探るような研究方法を確立された貴重な学者であります。五十年以上も長いあいだ研究なされた、そのあげくの果てにつくりあげたその書物の題名が「海上の道」というのですが、具体的にはどこなのかというと、沖縄から奄美にかけてのこのあたりをさしているのです。

島尾氏のこの主張が見られる「私の見た奄美」は1962年6月13日に鹿児島県大島郡市町村議会議員研修会での講演をもととしているが、柳田氏の『海上の道』が刊行されたのはその前年の1961年7月であった。島尾氏に大きな影響を与えたことは間違いない。柳田氏の学問は、日琉同祖論・北進論とくられるが、その柳田説を前提とすると、島尾氏の論も理解しやすくなる。したがって柳田説批判が、島尾説批判の際にも有効となろう。

以上、私なりに、島尾氏のヤポネシア論は、琉球弧にあてはめれば一定の有効性を持つが、日本全体を定義づける概念としては無理であろう、というのが私の見解である。

二 柳田國男とアイヌ

さて、私は旧稿でつぎのようなことを指摘した。

「日本語」を話す範囲を「日本」と考える先学として柳田國男氏をあ

げることができよう。柳田氏はいうまでもなく、民話・方言という「日本語」の枠内での研究を進めてきた先学である。柳田氏は琉球語を日本語の一方言と見なし、沖縄を日本の一部、というより、日本の原点と見なした。その反面、アイヌ語は日本語の方言とは認めがたかったため、アイヌおよびアイヌ語は、柳田氏の世界からは除外されてしまった。別の表現でいえば、アイヌ・アイヌ語は非日本的なものとして切り捨てられてしまったのである。

それでは、柳田國男氏は、アイヌをどのように見ているであろうか。柳田氏が、アイヌに関説しているのは、地名考証などを別とすれば、『雪国の春』と『豆の葉と太陽』および『樺太紀行』であろう。そこで、そこに見られるアイヌ関連の記述を、まずは抜粋してみよう⁽⁴⁾。(以下引用は、ちくま文庫版『柳田國男全集』2より)

○『雪国の春』

・「雪国の春」六

A 閉伊や男鹿島の荒蝦夷の住んだ国にも、入れ代わって我々の神を敬する同胞が、早い昔から邑里を構え満天の風雪を物の数ともせず、伊勢の暦が春を告ぐるごとに、出でて古式を繰り返して歳の神に仕えていた名残である。(『雪国の春』六〔『雪国の春』p.25])

・「真澄遊覧記を読む」五

B 松前滞在の日記は五種ほど今あるが、その間がきれていて踪跡が明らかでない。彼とやや似た境遇の漂泊者が、あるいは信仰を種としあるいは文学によって、幽かに生活の便宜を得ていたこと、口蝦夷の外部文化に触れているアイヌ等が、なお半ばは仙人のごとく取り扱われていたことなど、新しい印象は幾つもあるが、ことに珍しいのは松前城下の正月の記事であった。(『真澄遊覧記を読む』五〔『雪国の春』p.35])

・「草木と海と」玫瑰の紅

C ハマナスの根の皮は、採って染料にしている地方がある。北海道などでは実を貯えて食用とする土人が多く、寂しい旅の者ならずとも、親しみを感ずる木であった。蝦夷の浦々にも到る処に大きな群れがあったというから、夏場所

の漁民等には、花の中に起臥する者も多かったろうが、記録には取り立ててその美しさを語ったものがない。自分が旅中に見てきたのは、白糠以北の砂山から、釧路の港の後の岡などであった。（「草木と海と」 玫瑰の紅〔『雪国の春』p.84〕）

・「豆手帖から」 仙台方言集

D 野鄙と風雅との境界線については、将来も久しく大議論が続くであろう。しかしそんな差別は我々の高祖も想像せず、末孫も感じあたわざる差別である。いわんや一步仲間から外れて考えると、同じ時代においてもなお不可解で、我々はアイヌの社会に、沙留と石狩とがどれだけ異なるかを知らぬのである。方言でいってみても事実は一様で、いかによく似ていても沖縄では琉球語を独立した言語とし、与論島や喜界島では方言となるのは、結局は「これで好いのだ」と思うと思わぬとの差である。もっと適切に申せば笑われる語、匡正したくなる語が方言である。従って国民の結束が強くなって、次第に顕著なる現象が方言、方言の注意せられるのも国運隆盛の一兆候といい得る。（「豆手帖から」 仙台方言集〔『雪国の春』93P〕）

・「豆手帖から」 処々の花

E 炭焼きに教えられて小松林の近路を抜けてみると、そこにも別の旅人が立ち止まって牛飼いに同じ路を尋ねている。十頭近い牛が大息を突きながら現れて来る。この塙を行けば松が一本あると牛飼いが言った。ハナワは蝦夷語のバナワの名残で、上の平らな丘のことをいっているらしい。（「豆手帖から」 処々の花〔『雪国の春』128P〕）

○『豆の葉と太陽』

・「空から見た東北」一

F 蝦夷を現代の北海道に進化させた力としては、開拓使もありまた米国の農学者もあろうが、それよりも以前に人間の智慧をもって、こうした資本を労力に代位せしめんとした、隠たる営みがあったがゆえに、今に到るまでいわゆる遺利を拾いに入り込む者ばかりが、移民以上に取り囃さるる土地柄を作り上げたのである。（「豆の葉と太陽」 空から見た東北一〔『雪国の春』365P〕）

・「空から見た東北」二

G 私はこれが北方開発史の第一頁だなど、ひとりで高い処で感奮していた。この建網が津軽の荒海を越えて、次第に蝦夷地東西の各場所に広げられるまでには、もちろん実験と工夫との幾つかの改良が積み重なったであろうが、とにかく始めてこういう大袈裟な魚の罾、待っていて皆捕るという設計をした人は記念碑ものだ。〔「豆の葉と太陽」空から見た東北二〔『雪国の春』365P〕

・「風景の成長（談話）」五

H 花輪はもとアイヌ語から出たものらしく、今の語でいうと段丘端、東国でいう峡通りであるが、こういう通路の新たにできたものも、やはりまたどこにでも村を開くことの、可能になった結果であって、以前はそういう路線は設計する必要もなかった。〔「豆の葉と太陽」風景の成長（談話）五〔『雪国の春』537P〕〕

○『樺太紀行』〔『雪国の春』578～602P〕

・はしがき

I アイヌたちの部落を遠くから見ると、小屋も隠れるばかりたくさん魚が乾してある。それを冬中の食料にして、あの樺太の樞犬は育てて行くのだそうである。(579P)

・九月十四日 晴

J ここにコロボックルの遺跡多し。先頃は飯島博士もあまた採取してかえられたり。事務所もあまた集めおけり。

・九月十五日 晴（土）

K ガルキノウラスコエに近づく所にてあまたのアイヌにあう。幼児を腹に入れたる女の、杖つきて路をいそぐもあり。

・九月十六日（日）

L 朝東同伴してドヴキイに行く。マロエチキノという村を過ぐ。ナイブチ川の岸には小村多し。ニコライエフスコエにはアイヌも住めり。土地肥えたり。

…。路にてニコライエフスコエのアイヌ近藤太郎（ワシリ）、ナイブチの仙徳清之助、ロシエの中島宗太などにあえり。仙徳と中島は日本人との雑種かもしれず。

…

サカイはまに行く路に玫瑰あまた咲けり。ツボミもあれば赤き実も多くつけり。渚に近き草野に豎穴のあと多し。

オロチョンはコロボックルと同種ならんと栃内君などはいえり。従者にほらせたれど砂のみにて何も出ず。

サカイはまにて山本己之助の漁場を訪い、管理者小林にあう。これに案内させてアイヌの家を二三戸訪いたり。男は皆不在なり。物も言わで煙草のみのみであり。若き娘はさすがにやさし。我々を見てかくれたり。子供に菓子をやる。漁場では露人アイヌを使役す。酒、煙草を与えて利を見、もつとも亡状なるを常とす。山丹人というはギリヤックか。またはその雑種なるか。年々マキリその辺の器物を携へ来たりて、アザラシの皮などを買って帰るという。

ここよりドブキイにかえり、北の方ナイブチに行く。ここにもアイヌの家を見たり。仙徳清之助の家により、その母と妻にあう。

…

ドブキイにて見たる女よく肥えて十七なりといえり。雪のある頃マウカよりアイヌをつれて山越えせるにより、熊というアダナあり。

以上であるが、このうちE・Gは、地名のアイヌ語源説であるので、考察から除いて差し支えないであろう。また、B・C・F・Gに見られる「口蝦夷」・「蝦夷」・「蝦夷地」は土地・地方を指しているものと理解できるので、これも除いて差し支えないであろう。Aの「荒蝦夷」は、「入れ代わって我々の神を敬する同胞」と記しているので、そこに住んだ先住民と考えられるが、これはアイヌというよりエミシと考えた方がよいであろうので、これも除いてよいであろう。ちなみにDはアイヌ社会の地域差をいっているのも除いてよいであろう。ということで、それらを除けばすべて『樺太紀行』の記事となるが、JとLに見られる「コロボックル」関係も除いておこう。

さて、I・Kの記事は、集団としてのアイヌの記事であり、Iではアイヌの住む小屋が見えなくなるほどの沢山の魚が乾してあり、それを冬中食料として、樺太犬が育って行くのだ、と記している。Kでは、幼児を腹に入れたるアイヌ女性がいたことを記している。いずれも風俗習慣についての観察記事であるが、それ以上、突き詰めようとする姿勢は感じられない。

Lでは特定のアイヌの個人記事が見られる。柳田氏は何人ものアイヌに会うが、そのうち、「仙徳も中島は日本人との雑種かもしれず」とし、この二人は和人との混血ではないかと判断している。柳田氏がそう判断した理由は不明であるが、風体・服装などから判断したのであろうか。柳田氏はアイヌの家を二・三軒訪れたようである。成人男性はおらず、女性と子供たちだけだったようである。女性たちはたばこを吸っており、若い女性は優しく柳田氏たちを見て隠れたりしたようである。そのあとは、アイヌの家のことではなく、ロシア人はアイヌを使役し、酒・たばこを与えて利を得ていること、「山丹人」がマキリなどの器物を持ってきて、アザラシの皮などを買って帰ることなどを記している。このような簡単な記述しか見られないところを見ると、民俗学者柳田氏は、アイヌに関してはほとんど関心がないといわざるを得ない。柳田氏はアイヌは「日本人」ではないと理解していたとしか考えられまい。本節の冒頭で旧稿を引用したが、そこに「アイヌおよびアイヌ語は、柳田氏の世界からは除外されてしまった。別の表現でいえば、アイヌ・アイヌ語は非日本的なものとして切り捨てられてしまったのである」と記してあったが、じつは、それを書いた時点で、ここに記したことは、すでに確認してあった。旧稿で記したことの根拠を今示しているということとなる。

三 日本人の心のふるさと

最近、ある畏友から、楠正弘『文化学としての日本学』（創文社、1993.6）を貸していただいた。その書は、「序章」、「第一部 石田英一郎氏の日本文化論」、「第二部 和辻哲郎氏の日本風土」、そして「あとがき－終章にかえて」からなっている。「序章」では、日本研究をめぐる現状や課題などが述べられており参考になる。「あとがき」によると、筆者は、この書の表題を「文化学としての日本学」とするか、「国際学としての日本学」とするかについて迷ったのだが、東南アジアの日本研究者のすすめによって「文化学としての日本学」としたというが、私としては、「国際学としての日本学」と名付けて、その面での言及を深めていただきたいかった。本論で石田英一郎氏と和辻哲郎氏を取り上げているのは、筆者の世代や、筆者が宗教学者であることなどに起因してい

るようである。ここでは、内容についてはふれないが、筆者を含めてこの書に見られる主張は、日本学と言いつつも日本文化を一枚岩のものとして見ており、「日本（ヤマト）学」にとどまっていると言わざるを得ない、というのが私の感想である。その点、「日本の中の異文化」を標榜する私の立場とは異なっていることのみを指摘しておきたい。

しかし、日本文化の多様性を認めつつも、その根は一つと見る立場は、今もって主流であるし、今後もそうであろうと予想される。それについて、若干述べておきたい。先日、ある機関の長の方の講演を聞く機会があった。そこで述べられたのは、日本人の心といったことに関する内容であったが、日本人の心のふるさとは京都にあるという。同様のことは最近でも経験した。それは、ある知り合いの研究者から送られた本の帯にあるうたい文句である。いわく「日本人の心のふるさと」。これは本を売るためのうたい文句なので荒立てるつもりはないが、逆に言えば、「日本人の心のふるさと」と謳えば、本が売れると考えたからであろう。ただし、その本の内容はしっかりとしたものであり、本自体にけちをつけるつもりはない。

「日本人の心のふるさと」といった場合、どこを思い浮かべるであろうか。ふつう考えられるのが、上記した京都であり、あるいは奈良・飛鳥であろうか。また富士山などをあげる人もいるかもしれない。しかし、これはあくまで「日本（ヤマト）」的発想である。沖縄の人、あるいはアイヌの人に「あなたの心のふるさとは？」と尋ねた場合、京都・奈良・飛鳥がすぐさまあがってくるであろうか。沖縄の人であったら、まずもって沖縄、とくに自分が生まれ住んだ島（あるいはシマ）であり、あるいは御嶽、久高島などもあげられるかもしれない。アイヌの人にとっては、まずはアイヌモシリたる北海道であろうし、自分の生まれ住んだ土地であろう。あるいは、神々であるかもしれない。けっして京都・奈良・飛鳥ではないと思う。

そんなことを想定しながら、アイヌの方に質問してみた。「心のふるさとといたら何を思い出しますか」。その答えはふるさとの山川であり、さまざまなカムイであるという。私が尋ねたのは、日高地方浦河町出身の浦川治造さんであったので、ふるさととはアネチャ（浦河町姉茶）である。治造さんにさらに聞いてみた。「日本人の心のふるさとと聞かれたら」。答えは「そんなものね

え」であった。

同様のことを、沖縄の方にも質問してみた。「心のふるさとといったら何を思い浮かべますか」。その答えはふるさとの島や海であるという。私が尋ねたのは、八重山出身のYさんであったので、ふるさととは八重山である。Yさんにさらに尋ねてみた。「日本人の心のふるさとと聞かれたら」。Yさんは首をかしげるのみで、答えは何えなかった。

考えてみたら当然である。沖縄（琉球）の人、アイヌの人が日本人になったのは明治からであり、それ以前は、別の神（神々）を信仰し、別の権力に支配されていたからである（アイヌの場合、統一権力はもたなかったようであるが）。それを画一的な文化のもとに住んでいた同民族と考えるのは無理があろう。

三月の沖縄のシンポジウムでも感じたことであるが、「琉球語」を「日本語」の一方言と見なすのではなく、別な言語と考えた方がよいのではというのが、私の今のところの判断である。なるほど、「琉球語」は「日本語」から派生した言語であり、古体を残しているようである。逆にいえば、「日本語」は、「琉球語」を派生した後に変化を遂げたということである。それは大陸、あるいはヨーロッパ世界との交流などによるものもあったと考えられよう。先にふれた島尾敏雄の、「シマグチ」と「ヤマトグチ」と比較すると、「ヤマトグチ」の方が中国の影響を強く受けている、という主張なども、その点から理解できる。言語学のみ観点からいえば近似していても、長い間別の歴史をたどったことも事実である。たとえば琉球は尚氏王朝を樹立していたのであり、別の民族としての歩みを進めていたと見るべきであり、言語も別のものと見た方がよい、と私は考えている。「琉球語」を「日本語」の方言とするのなら、ヨーロッパのいろいろな言語はすべてとってよいくらい方言といわなければならないということになろう。

四 義経伝説と為朝伝説

「日本の中の異文化」という視点から、北方史つまり蝦夷・アイヌ等の歴史、南方史つまり琉球・沖縄等の歴史を進めてきたが、つぎのことに興味を引かれた。それは、琉球・アイヌの歴史に特定の「日本（ヤマト）人」がかなりの意味をもって現れてくることである。アイヌ史でいえば源義経であり、琉球史でいえば源為朝である。ともに平末鎌初の武士であり、天皇には直接つながらない点に興味が引かれる。

源義経伝説については、いずれ別に成果が発表されると思われるのでここでは詳述せずに簡単に触れることとする⁽⁵⁾。義経は源頼朝の平泉攻めを恐れた藤原泰衡に攻められて死去したわけであるが、古くから北方に逃げ延びたという伝説があり、さらには大陸に渡ってジンギスカンとなったという伝説さえ生まれた。実際、北海道にはアイヌに親切であったと語られる義経伝説が多く伝わっており、平取町には義経をまつる義経神社があり、近藤重蔵がもたらしたという義経像も伝わっている。また義経に近侍したとされる弁慶も義経とともに北海道に渡ったということになっていて、寿都町には弁慶岬があり、近くには弁慶がアイヌと相撲を取ったと伝える土俵といわれるものもある。

為朝伝説についていえば、今帰仁町の運天港の裏山には源為朝上陸の地と書かれている石碑も建てられている。琉球の最初の伝説上の王である舜天は為朝の子供ということで日琉同祖論の一つの根拠となっている。日琉同祖論は羽地朝秀あたりに源流が求められ⁽⁶⁾、近代の柳田國男・伊波普猷あるいは先にふれた島尾敏雄にも見られ、沖縄の人びとも多く受け入れられてきた理解である。しかし、近年、沖縄の独自性を見いだそうとする脱日琉同祖論が拡がり始めているようである。私も基本的には、日琉同祖論的立場とは距離をおいている。

源義経にせよ源為朝にせよ、それをもう少しつっこんでいえば、「日本（ヤマト）」の歴史上、最初の武家政権樹立者とされている源頼朝に近い人物である。それは、両伝説が「武士の世」に創設された伝説であることに由来すると思われるが、「日本（ヤマト）」とアイヌ・琉球との関係史を考える上で興味深いことからである。

そんなことを念頭におきながら、沖縄あるいは北海道（アイヌモシリ）に調

査に出向いている。

五 境界域

私は、基本的に現代の日本は、「日本（ヤマト）」民族、琉球（沖縄）民族、アイヌ民族からなると考えているが、歴史的に見ると、その三者の間には境界域があった。ここで境界域とは、ブルース・バートン氏のいうフロンティアであり、線ではなく面である⁽⁷⁾。3月のシンポジウムの際、高宮広土氏から基本的には3区分でよいが、その間の境界域を考慮して5区分すべきである、というご指摘をいただいた。それにはもちろん私も賛成で、北の方は、蝦夷（エミシ）を考慮に入れて、蝦夷・アイヌというように表現している。それでは、南方はどのようなのであろうか。

私は旧稿で、吉田孝『日本の誕生』（岩波新書）、網野善彦『「日本」とは何か』（講談社版『日本の歴史』第00巻、2000）などの主張に依拠しつつ、つぎのように述べておいた。

狭義のヤマトとは、古代王権が直接の勢力基盤とする範囲で、畿内を指すものと考えてよいであろう。その権力が支配を及ぼす範囲、それが広義のヤマトである。律令制成立段階でいえば、東北中部から九州中部付近までである。東北中部以北および南九州はヤマトの範囲外であったと考えられる。このヤマトが、従来考えられていた「日本」の基本をなす。それ以外は化外としてヤマトの範囲外、つまり「日本」ではない。東北北部の地の人びとは、畿内の王権に属さない化外の民として蝦夷と呼ばれ、南九州の民は隼人と呼ばれていた。

すなわち、南方では隼人の存在が考えられる。隼人は、蝦夷より先に畿内皇権のもとに包摂されたと考えられるが、長い間、大嘗祭の際の「隼人舞」などの形で、服属した民として、その名は残している。

最近、北方史が盛んで、アイヌ研究とともに蝦夷研究が、多くの研究者の関心を集めている。私も、アイヌとともに蝦夷に深い関心を寄せ、昨年（2003年）8月には、陸前高田市で「海の蝦夷－小泉遺跡が語りかけるもの」と題するシンポジウムを開催し、その報告書も刊行した。そのシンポジウムは蝦夷研究会

のメンバーの協力によってなったものであるが、蝦夷研究会が隼人文化研究会と提携していることを知った。じつは、陸前高田市のシンポジウムの際には、隼人文化研究会の事務局を務めておられる永山修一氏も参加していただいたのである。長い間、隼人研究のことが気になっていたのであるが、今年の3月末に、鹿児島に調査に赴き、隼人関係史跡・施設を見学するとともに、事務局の永山修一氏にお話を伺うことができた。そのときのメモによると隼人文化研究会は1972・73年ころ、歴史・民族・考古の分野の研究者が参加して始まり、年11回（除く8月）の研究会をもち、その時点で340回ほどに達しているという。研究会のほか機関誌として『隼人文化』を刊行しているが、最近、会誌の発行は止まっているようである。機関誌が休刊になったのは、会の活動が下火になったということではなく、発表の場が他にも求められるようになったからであると伺った。事実、研究会は行われているとのことである。隼人文化研究会の機関誌『隼人文化』の論文目次を見ると、内容は隼人に限定したものではなく、ひろく鹿児島や奄美・沖縄地方の歴史・民俗・考古分野などが取り上げられている。機関誌発刊当初はA・スラヴィーク、ヨーゼフ・クライナー氏や住谷一彦氏などの名が見られ、ついで櫻井徳太郎・谷川健一・大林太良・直江広治氏など錚々たるメンバーが寄稿している。なお、隼人文化研究会は1993年に、論集『隼人族の生活と文化』（雄山閣出版）を編集・刊行している。同書は、同研究会が結成後20年を経過したことを契機として編集されたもので、機関誌『隼人文化』の中から会員各自一編ずつ選んで一書としたものである。「日本の中の異文化」研究を進めるにあたっては、北方の蝦夷（エミシ）と同様、隼人の存在を見落してはならない。

むすび

以上、国際日本学研究を進める際に気がついた事柄をメモ風に書き留めてみた。

私自身の本来の研究分野は「日本（ヤマト）」の古代中世史である。それが縁あって国際日本学なるものを提唱し、その研究を進めるようになった。「日本（ヤマト）」の研究を捨てたわけではないが、今はしばらく、「日本（ヤマト）」

以外の研究に注目している。その中で、多くのことを学ばせていただいた。それらの内、とくに気がつき、自分なりの見解を持てるようになったものを記させていただいたが、これ以外でも、関心を寄せた事柄は多々ある。それらについても自分なりの見解を持てるよう、しっかりと勉強を進めたいと考えている。

もうしばらく、蝦夷・アイヌ、琉球・沖縄、そして隼人に目を向け続ける覚悟である。

注

- (1) ただし、中心に据えるべきは、あくまでも上記2の「日本研究」である。上記1の「メタサイエンス」は、研究の「方法（論）」にすぎない。
- (2) この「沖縄のアイデンティティ」国際シンポジウムは、2003年3月9日～12日に、法政大学多摩キャンパス内、百周年記念館で行われた。初日の未公開で、あとは限定的に招待し、あるいは申し込み頂いた方々のみ聴講していただいた。同記念館には宿泊設備も整っており、4日間寝起きを共にしてのシンポジウムであったので、連帯感が形成され、大変な成果があげられた。一日も早く報告書を世に聞きたいと考え、現在編集集中である。同シンポジウム参加者は以下のとおり。
 - 〈文学〉 仲程昌徳（琉球大学）、マイケル・モラスキー（ミネソタ大学）
 - 〈歴史〉 真栄平房昭（神戸女学院大学）、ローザ・カーロリ（ベネチア大学）、グレゴリー・スミッツ（ペンシルバニア州立大学）
 - 〈思想史／民族学〉 住谷一彦（立教大学）、比嘉政夫（沖縄大学）、ヨーゼフ・クライナー（ボン大学）
 - 〈言語〉 大西正幸（シドニー大学）、バトリック・ハインリッヒ（デュイスブルグ大学）、レオン・A・セラフィム（ハワイ大学）
 - 〈文化史〉 濱下武志（京都大学）
 - 〈先史学〉 高宮広土（札幌大学）
 - 〈経済〉 清成忠男（法政大学）
 - 〈音楽〉 金城厚（沖縄県立芸術大学）、ロビン・トンプソン（ロンドン在中音楽家）
 - 〈博物館／美術〉 佐々木利和（放送大学）
 - 〈戦後処理〉 我部政明（琉球大学）、ガブリエレ・フォークト（コーネル大学）、コージ・タイラ（イリノイ大学）
 - 〈司会〉 中野栄夫
- (3) 島尾敏雄氏自身が編んだ同氏編『ヤポネシア序説』（創樹社、1977.2）のほか、島尾氏の著作は多く、それらは『島尾敏雄全集』（全17巻、晶文社）に収録されており、またヤポネシアに関するものとして、『ヤポネシア序説』の他、島尾敏雄対談集『ヤポネシア考』（草書房、1977.11）などがあり、また『島尾敏雄全集』から南党に関するエッセイを抜き出した『新編・琉球弧の視点から』（朝日文庫、1992.8）などもあるが、ここでは比較的初期のものである『ヤポネシア序説』を用いた。
- (4) 柳田國男は、「地名の研究」（ちくま文庫版『柳田國男全集』20）でも、アイヌ語地名について多く述べているが、ここでは省略する。
- (5) 源義経伝説については和氣俊行氏が研究を進めており、いずれ成果が発表されるはずである。
- (6) 『保元物語』（古活字本）にその根拠が求められているようである。
- (7) ブルース・バートン『日本の「境界」 前近代の国家・民族・文化』青木書店、2000。